中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

支援のカタチ

開成町立文命中学校
三年　井上心結

皆さんは人からの親切な行動を素直に受け取れなかった事はあるだろうか。せっかくの善意でしてくれた行動に「ありがとう」の気持ちと、ほんの少しの「モヤッ」とした感情が生まれたことが私にはある。その瞬間、そんな自分が嫌だった。それは学校の下駄箱での話だ。空いている下駄箱が一番上にしかなく、少し高い位置だったがそこに私は靴を入れた。帰りに友人が「取ってあげるね」と一番上に入った私の靴を取ってくれた。私は、「ありがとう」と言葉を返した。ただ友人は自然に親切な行動をしてくれただけ。それなのに私は、少しだけ「モヤッ」としてしまった。何でそのような感情を抱いてしまったのだろう。

私は小学校の頃から低身長でずっと病院に通っている。毎月の注射や血液検査・レントゲン・毎日の服薬。慣れたけどやっぱり大変だったし嫌だった。身長が低いことで何をするにも一番前、目立つことが苦手な私はそれがとても苦痛だった。話を戻すと靴は自分で入れたのだから自分で取れるのだ。「自分で取れるのに…。」今までの嫌だった経験が積み重なり、私の心の中ではせっかくの友人の優しさが「小さい子扱いされた」という思いに変換されてしまった。それがまさに「モヤッ」の発信源だった。友人は何も悪くない。

そんな話を母に相談したところ、母はまさに私と逆の立場で行動してしまい、反省しているという話をしてくれた。母の職場には、車椅子の方がいらっしゃるそうだ。母はその方が職場の出入りをする時に、扉を開けて待っていたことがあった。その時は「ありがとう」と言われ、普通に過ごしていたがよく観察してみるとその方は何度も出入りをしており、扉の周りにいた他の方は特に補助をすることはなかった。そこで母は「余計なことをしてしまった」と思ったそうだ。周りの方は決して不親切ではなく、あえてお手伝いをしていないのだろうと母は気づいた。母は続けて職場での話をしてくれた。避難訓練の際その方は、「後で避難場所で合流しようね」とみんなに声を掛けられていた。実際の災害時、周りに人がいるとは限らない。その時のため、まずは一人で避難できるようにという意図だった。そして、職場の方はこう続けた。「本当に困った時は皆で担いで避難する準備はできているから」と。母はこれが本当の支援なんだと思ったそうだ。私はこの話を聞いて、いざという時に手を貸してもらえる安心感という土壌がある上で、本人の力で何でも行動できるように良い意味で「手

を離すこと」が出来ていると感じた。必要以上の支援はされる側にとっては負担になってしまうこと・本来できることを妨げてしまうこともある。扉を開けることも一つの支援だが、もう一歩踏み込んで、心地良く居やすい環境を共に造ることも大事な支援だと思う。まずは躊躇なく声掛けをし、支援することはとても大切なことだ。その次は、その人を良く知りその人にあった支援とは何かを考えて行動することが必要なのではないだろうか。そう考えると支援とは、特別なことではなく人と人とのコミュニケーションそのものではないかと思う。母の職場では、日頃から十分にコミュニケーションが取れているからこそ良い関係性が築けたのだろう。私も友人が靴を取ってくれた時に「ありがとう！でも私、届くんだよね～」と少しでも軽く返せていれば良かった。私の「モヤッ」はコミュニケーションを取ることで簡単に解消できたはずだ。障がいのあるなしに関わらず、相手を良く知り、自分のことも知ってもらう。その積み重ねが支援の大切な一歩になる。人の数だけ支援のカタチがある。日々のコミュニケーションの中で、私はこの問いかけを忘れずにしていきたい。

「あなたのカタチはどんなカタチ？」